



人類の進歩と調和

公益財団法人日本植物調節剤研究協会 評議員

一般社団法人日本植物防疫協会 理事長

早川 泰弘

昨年大阪・関西万博が開催された。開幕前や開幕当初は盛り上がり欠けたが、実際に来場した人の感想などがSNSで拡散するにつれ人気は右肩上がりとなった。その結果、記録的な猛暑だったにもかかわらず夏休みシーズンや閉幕直前に大勢が詰めかけた。万博事務局によると、一般来場者数は2,557万人に達し運営費収支の採算ラインとされた2,200万人を大きく上回ったとのことである。筆者は行かなかったが身近で行った人たちの感想を聞くと概ね好評だったようだ。

我々の世代で万博というと、何と言っても1970年(昭和45年)に開催された「大阪万博」である。戦後、1964年(昭和39年)の東京オリンピックに次ぐ国際的なビッグイベントで、公式記録によると外国からの来場者を除いても約6,250万人が来場したとのこと。当時の日本の人口が約1億300万人だったので実に日本人の6割以上が訪れたことになる。国を挙げての熱狂ぶりが容易に想像できよう。掲題の「人類の進歩と調和」はその大阪万博のテーマだった。長野市の郊外で生まれ育った当時中学二年生だった筆者も家族で行った。それまで県外(といっても隣県)に数えるほどしか出たことがなく関西は初めての大旅行だった。万博会場では、髪の色、皮膚の色、目の色、体格が日本人と異なる大勢の外国人を初めて目の当たりにし、眩いばかりのパビリオンや「太陽の塔」のようなモニュメントに心を躍らせた。自らの世界が広がった思いがした。

似たような思いを人生で三度ほど経験したような気がする。二度目は1979年(昭和54年)、大学四年生の夏休みにバックパッカーとして1か月間西ヨーロッパを旅行した時だ。成田空港開港二年目で、航空会社はソ連(当時)のアエロフロート。当時は冷戦時代で北回りのヨーロッパ便はソ連上空を飛べなかったが例外はアエロフロートだった。早くて安いので学生に人気があった。駐機場でひと際小さくて目立った飛行機がアエロフロート機だった。一つの通路の両側に三席ずつの小型機。飛行機に乗るのは生まれて初めてだったがこんな小さな飛行機で本当にヨーロッパまで辿りつけるのか不安を覚えた。持参したガイドブックはこの年創刊された「地球の歩き方(ヨーロッパ編)」。

ら紙の粗末なガイドブックだったが貧乏学生に必要な情報が多く現地で重宝した。ちなみに創刊号はヨーロッパ編とアメリカ編の2巻のみだった。現在カラー刷りで何十か国もの外国のみならず国内までも対象とした「地球の歩き方」を見るにつけ、隔世の感を禁じ得ない。テレビ、映画、書籍でしか知り得なかった様々な異文化に1か月間じかに触れ、大阪万博で感じた気分を再び味わった。

三度目は1989年(平成元年)である。この年の11月にベルリンの壁が崩壊し、12月のマルタ会談で米ソ首脳(米：(父)ブッシュ大統領、ソ連：ゴルバチョフ書記長)による東西冷戦の終結が宣言された。当時筆者はジュネーブの国際機関に出向しておりこの状況を肌で感じる事ができた。上司の西ドイツ人(当時50歳)は父母の代に東ドイツ(プロイセン)から西ドイツに移住した方だったが、「自分の生きている間にこのような日が来るとは夢にも思わなかった」と感慨深げだった。総じて、西側出身の職員は歓迎ムードだったが東側出身の職員は歓迎するものの今後の母国の行方に不安を隠せない様子だった。筆者自身は、長い冷戦が終わり今後の世界は自由と平和に満ちた明るいものになるのではと期待した。大阪万博のテーマ「人類の進歩と調和」に着実に向かっているとも思った。

それから三十年以上たったが、世界はそうにはならなかった。冷戦という重しが取れた世界は民族間・宗教間の対立・紛争が激化した。さらに近年のグローバリズムの進展とその反動の中で、現在の超大国のリーダーたちは、軍事力や経済力を背景に自国の利益のため、それまでに長い時間をかけて国際社会が築き上げてきた国際ルールを平然と無視し国際秩序を平然と破壊している。彼らには人間の尊厳、倫理、世界平和などの価値観はないようだ。彼らが退場した後に聡明なリーダーたちが登場し、遠ざかった「人類の進歩と調和」に世界が再び向かうことはあるのだろうか。かつて「自分の生きている間にこのような日が来るとは夢にも思わなかった」と語ったドイツ人の上司と同じ思いを、生涯四度目の胸のすく思いとして味わえる日が来ることをかすかながら期待している。